

# 江戸時代農村住民の生命表

小林 和 正

## は し が き

通常、生命表の作成は、はじめに特定期間の男女別年令別中央人口  $P(x)$  及び同期間の男女別年令別死亡  $D(x)$  が分つていて、これより男女別年令別特殊死亡率  $m(x)$  を算出し、この  $m(x)$  から静止人口の死亡率  $q(x)$  を導くことから始められる。したがつてこのような方法による生命表の作成は  $P(x)$  並びに  $D(x)$  が得られるような比較的最近の時代についてはじめて可能であるが、不幸にして  $P(x)$  は分らなくとも幸い  $D(x)$  が得られるような場合には、この  $D(x)$  を出発点として生命表を作成する試みが、特に比較的古い時代について諸多の学者によつて行われており、これによつて人類の寿命の変遷を出来る限り過去まで遡つて眺めてみてみようとする努力がなされている。

その主なものには例えば、Pearson (1902)<sup>1)</sup> の古代エジプト人に関する、MacDonell (1913)<sup>2)</sup> の古代ローマ人に関する、Russell (1937)<sup>3)</sup> の 13—14 世紀のイギリス人に関する、I-chin (1931)<sup>4)</sup> の南支那人に関する研究等がある。これらの研究に用いられた  $D(x)$  の資料、即ち或る期間の年令別死亡数の資料は、墓碑銘や古文書より得られたものであるが、以上に挙げた諸研究のほか、発掘人骨の判定年令に基いて平均余命の計算を試みたものもある。例えば Angel (1947)<sup>5)</sup> は古代ギリシヤ人について之を行つている。しかし人骨、時に古代人骨は年令の判定が一般に困難なために、人骨に基く寿命の論議は大まかな年令区分による死亡数の分布を問題にしている場合が多い。<sup>6)</sup>

- 1) Pearson, K. : On the Change in Expectation of Life in Man during a Period of Circa 2000 Years. *Biometrika*, 1, pp. 261—264, 1902.
- 2) MacDonell, W.R. : On the Expectation of Life in Ancient Rome and in the Provinces of Hispania and Lusitania. *Biometrika*, 9, pp. 366—380, 1913.
- 3) Russell, J.C. : Length of Life in England 1250—1348. *Human Biology*, Vol. 9, No. 4, 1937.
- 4) I-chin, Y. : Life Tables for a Southern China Family from 1365 to 1849. *Human Biology*, vol. 3, No. 2, 1931.
- 5) Angel, J.L. : The Length of Life in Ancient Greece. *Journal of Gerontology*, Vol. 2, pp. 18—24, 1947.
- 6) 人骨資料に基く主な研究  
(旧石器時代) Weidenreich, F. : The Duration of Life of Fossil Man in China and the Pathological Lesions found in his Skeleton. *Chinese Medical Journal*, Vol. 19, May 1947.  
(旧一中石器時代) Vallois, H. : La durée de la vie chez l'homme fossile. *L'Anthropologie*, Vol. 47, Dec., 1934.  
(新石器時代) Euler, H. & Werner, H. : In welchem Alter starben die Jungsteinzeitmenschen? *Altschles. Bl.* XI, 139—141, 1936.

さて死亡数の記録が何によつて得られたものにせよ、年令別死亡数  $D(x)$  のみ与えられて、これを基にして生命表を作成するには出発点に於て1つの仮定を設ける必要がある。それは与えられた  $D(x)$  を直ちに生命表の死亡数  $d(x)$  と看做すことである。しかしそれは与えられた死亡の生起した母体人口を静止人口とみなす場合にのみ可能である。現実の人口に対して之を静止人口と看做すことは厳密な意味では常に困難であるが、前記の諸研究は、いずれもその当時の人口を比較的静止人口に近いものと看做した上で行われたものである。したがつて  $D(x)$  のみから生命表を作成する場合には、こゝに既に或る程度の誤差の生ずることを覚悟しなければならない。そのほかになお、比較的古い記録においては、得られた死亡数それ自体の信頼性に問題が残るのであり、特に幼年及び老年の死亡数に対しては記録洩れの比較的的多いことを顧慮しなければならないであろう。この2つの問題のために年令別死亡数のみから作成された生命表は可成り推定的なものにとどまらざるを得ない。しかし幸いにして年令別死亡数のみでも入手しうるならば、その母体人口が静止人口に近いと看做される限り、これを基礎にして生命表を作成してみることは、或る程度の誤差は常に見込まなければならないとしても、決して無益な試みではあるまい。

筆者は我が国の明治以前の時代における寿命を計算した前例の未だ見当たらないのに鑑みて、諸家の発表されている日本の人口史的資料のうちから、年令別死亡数の掲げてあるものを探し求め、そのうち比較的使用に耐えうると考えられた1例に基いて、上記の筆法による生命表の作成を試みた。その資料は、関山直太郎氏著、「近世日本人口の研究」昭和23年6月の155—156頁に掲載されている信濃国伊那郡虎岩村における男女別5才階級別死亡数である。

## 基 礎 資 料

この虎岩村の年令別死亡数は、同村の宗門改帳及び出入差引増減帳に基いて、関山氏が採録されたもので、同村住民の1812年(文化9年)より1815年(文化12年)に至る間の死亡数である。

虎岩村は現在長野県下伊那郡下久堅村大字虎岩となつている部落で、天竜川の段丘上にあり、水田稲作及び養蚕を主な生業としている。近世の虎岩村については平沢清人氏の詳細な社会経済史的研究があるが、これによると同村の人口は1813年796人、1815年803人で、その間の年平均増加率は0.44%である。僅かの増加を示してはいるが、本稿の生命表作成にとつて重大な障害となる程度のものであるまい。

さて与えられた死亡数に対する信頼性については、今こゝでこの関山氏の著書以前に遡つて検討する余裕がないために、言及を不可能とするが、だゞ実際に生命表を作成した結果からみると、後述するように、女の死亡記録は男のそれに比べて些か不完全のもののように考えられた。なお乳幼児における死亡数については関山氏の次の如き註釈がある。即ち、「……当時の宗門改帳に1才未

(青銅器時代) Franz, L. & Winkler, W. : Die Sterblichkeit in der frühen Bronzezeit Niederösterreichs. Zeitschrift für Rassenkunde, Bd 4, 1936.

(9—18世紀アメリカインディアン) Goldstein, M. S. : Some Vital Statistics based on Skeletal Material. Human Biology, Vol. 25, No. 1, 1953.

(10世紀頃ドイツ) Schaefer, U. : Demographische Beobachtungen an der wikingerzeitlichen Bevölkerung von Haitabu. Zeitschrift für Morphologie u. Anthropologie, Bd 47, Heft 2. 1955.

7) 平沢清人：近世南信濃農村の研究。日本評論社、昭26。

満、時には2, 3才未満の死亡者が屢々除外されており、即ちかゝる者は当初から帳簿に登載されなかつた……」(前掲書158頁)とある。したがつてこれらの年令層の死亡数は可成り過少に記録されていると考えてよく、従つて本稿の計算においてはこれらの年令部分(5才未満)については、後述するような補足(死亡数を2倍する)を行つた。

関山氏の掲げた死亡数の記録された期間は1812年乃至15年とあるのみで、正確な期間の長さは明かでないが、今仮りにそれを3.5年とすると、死亡率は1,000につき60程度のものとなる。しかし本稿の計算にとつて期間の不明なことは妨げにはならない。

なお関山氏の記録している年令は1才よりはじまる数え年計算になつてゐるが、本稿では之を1才ずつずらすことによつて、0才からはじまる年令系列に直した。

### 年令別死亡数と幼少年令部分に対する補足

信濃国伊那郡虎岩村の1812—15年の男女別5才階級別死亡数として関山氏の挙げてゐる数字は表1の如くである。

このうち、本稿では前にのべたような幼少年令部分の死亡者の記録洩れに対して修正を行うため

表1 男女別年令別死亡数

年 令	男	女	計
0—4	17	14	31
5—9	4	8	12
10—14	2	3	5
15—19	3	3	6
20—24	4	3	7
25—29	3	0	3
30—34	1	1	2
35—39	2	2	4
40—44	3	2	5
45—49	2	5	7
50—54	7	6	13
55—59	5	4	9
60—64	6	2	8
65—69	6	6	12
70—74	8	10	18
75—79	7	5	12
80—	8	7	15
計	88	81	169

に、0—4才階級の死亡数を男女共2倍し、更にこの年令階級の平均余命曲線を画く便宜のために、この部分の死亡数を表2に見るような配分で各才別に分けた。

この補足のために、死亡総数は男105、女95となった。

表2 0—4才死亡数の補足と各才別割当

年 令	死 亡 数	
	男	女
0	24	18
1	4	4
2	2	2
3	2	2
4	2	2
計	34	28
5以上	71	67
総 計	105	95

### 生存数の算出と補整

さて5才未満については表2の如き死亡数が、5才以上については表1の如き死亡数が構成する

8) 13—14世紀のイギリス人について平均余命を計算した Russell (註3. 参照) の場合は、20才以下の年令別死亡数の記録が欠けていたために、20才以下に対して、死亡数を最小限に見積つた場合と最大限に見積つた場合とについて、夫々各才別の死亡数を仮定しこれにより20才以下の平均余命を各才別に算出している。

死亡秩序を直ちに生命表の死亡秩序として用いるのが本稿の計算の基礎となるのであるが、そうすると生命表人口は、男女共夫々の死亡数に等しいだけの出生時の人口から上記の年令別死亡数の形づくる死亡秩序に従つて生存数を減じてゆく形をとる。そこで先ず年令階級内の死亡数に基いて年令階級の初年に達する生存数を算出した(表3)。次に0才の生存数を男女共夫々1,000と置いて、上記の各年令の生存数(実数)を之に対する比例値に直した(表3)。

表3 死亡数(実数)及び生存数[実数及び比例値  $l'(x)$ ]

年令 x	男			女		
	年令階級内の死亡数 (実数)	年令階級の初年に達する生存数 (実数)	同左 (比例値) $l'(x)$	年令階級内の死亡数 (実数)	年令階級の初年に達する生存数 (実数)	同左 (比例値) $l'(x)$
0	24	105	1,000	18	95	1,000
1	4	81	771	4	77	811
2	2	77	733	2	73	768
3	2	75	714	2	71	747
4	2	73	695	2	69	726
0—4	34	105	1,000	28	95	1,000
5—9	4	71	676	8	67	705
10—14	2	67	638	3	59	621
15—19	3	65	619	3	56	589
20—24	4	62	590	3	53	558
25—29	3	58	552	0	50	526
30—34	1	55	524	1	50	526
35—39	2	54	514	2	49	516
40—44	3	52	495	2	47	495
45—49	2	49	467	5	45	474
50—54	7	47	448	6	40	421
55—59	5	40	381	4	34	358
60—64	6	35	333	2	30	316
65—69	6	29	276	6	28	295
70—74	8	23	219	10	22	232
75—79	7	15	143	5	12	126
80以上	8	8	76	7	7	74

こうして得られた生存数を  $l'(x)$  とし、次にこの  $l'(x)$  に曲線による補整を施して、補整せられた生存数  $l(x)$  を求めた。この  $l'(x)$  の補整には年令を3区分して夫々次の様な曲線を用いた。

1—5才 3次曲線  $y=a+bx+cx^2+dx^3$

5—55才 同 上

表4 生存数の実際値と理論値

年令	男					女				
	実際値 l'(x)	理論値			l'(x)	実際値 l'(x)	理論値			l'(x)
		3次曲線		ゴンパー ツ・メー カム曲線 60-80才			3次曲線		ゴンパー ツ・メー カム曲線 60-80才	
		1-4才	5-55才				1-4才	5-55才		
0	1,000				1,000	1,000				1,000
1	771	771			771	811	811			811
2	733	734			734	768	769			769
3	714	712			712	747	745			749
4	695	696	689		693	726	727	729		728
5-9	676	676	680		678	705	705	702		704
10-14	638		640		640	621		630		630
15-19	619		608		608	589		582		582
20-24	590		581		581	558		553		553
25-29	552		558		558	526		535		535
30-34	524		537		537	526		524		524
35-39	514		516		516	516		514		514
40-44	495		493		493	495		497		497
45-49	467		466		466	474		470	486	470
50-54	448		432	442	437	421		425	421	423
55-59	381		391	383	387	358		357	365	365
60-64	333		341	328	335	316		259	316	316
65-69	276		278	274	276	295		127	273	273
70-74	219			216	216	232			232	232
75-79	143			149	149	126			178	178
80-84	76*			66	66	74*			74	74
85-89				16	16				0.7	0.7
90-94				0.8	0.8				0.0	0.0
95-99				0.0	0.0					

\* 80才以上全部を含む

60-80才 ゴンパーツ・メーカム曲線  $y=ks^2g^{ax}$

これらの方法<sup>9)</sup>によつて求められた理論値は表4に示す通りであるが、この3つの曲線を接合して<sup>10)</sup>同表にある如き  $l'(x)$  を求めた。

9) 得られた曲線方程式は次の如くである。

(1) 1-5才 : 使用値  $l(1), l(2), l(3), l(4), l(5)$

男  $y=831.80-76.4526x+16.964286x^2-1.5833333x^3$

女  $y=881.90-87.5238x+19.642857x^2-1.8333333x^3$

(2) 5-55才 : 使用値  $l(5)$  より  $l(55)$  までの5才毎の  $l(x)$

男  $y=729.14-10.9208x+0.227879x^2-0.00256255x^3$

女  $y=803.99-23.7930x+0.719176x^2-0.00789864x^3$

(3) 60-80才 : 使用値  $l(60), l(70), l(80)$

男  $lg y=3.2295007-0.0116241x-0.000000768 \times 1.1793099^x$

女  $lg y=3.2459557-0.0124333x-0.000000000000937 \times 1.4375800^x$

10) 3曲線の接合は次の如き方法で行つた。

3次曲線(1-5才)と3次曲線(5-55才)との接合は4才及び5才に於て行い、 $l(4), l(5)$ はこの両曲線から求めた理論値の平均をとつた。3次曲線(5-55才)とゴンパーツ・メーカム曲線(60-80才)との接合は男子では50才、55才、60才及び65才に於て行い、 $l(50), l(55), l(60)$ 及び $l(65)$ は上と同様この両曲線の理論値の平均をとり、女子ではこれを50才のみに於て行つた。

图1 生存数曲线  $l(x)$

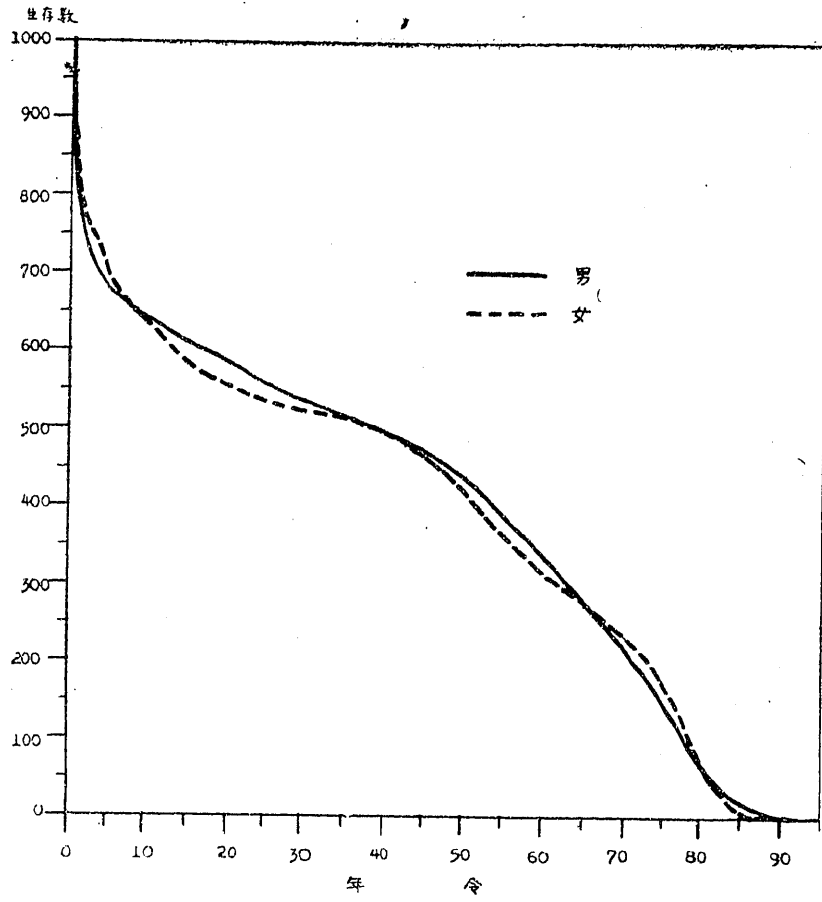
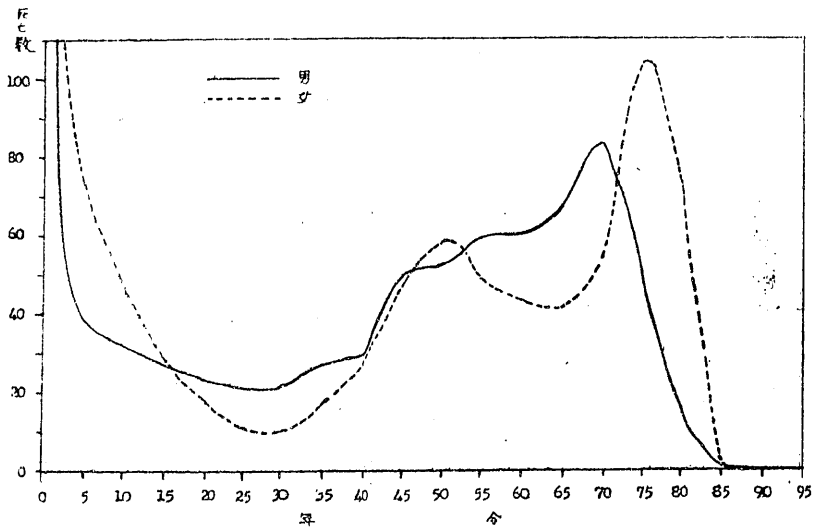


图2 死亡数曲线  ${}_t d(x)$



## 生命表の作成

こうして得られた生存数 $l(x)$ を基礎にして以下に述べる順序で生命表を作成した。

(1) 死亡数  ${}_n d(x)$  : 5才未満は各才別死亡数  $d(x)$  を, 5才以上は5才階級毎の死亡数  ${}_5 d(x)$  を求めた。5才未満では,

表 5 信濃国伊那郡虎岩村住民生命表 (1812—15年)  
(1) 男

x	l(x)	${}_n d(x)$	${}_n q(x)$	${}_n p(x)$	L(x)	T(x)	${}^o e(x)$
0	1,000	229	0.229	0.771	885.5	36,845.9	36.8
1	771	37	0.048	0.952	750.0	35,960.4	46.6
2	734	22	0.030	0.970	722.0	35,210.4	48.0
3	712	19	0.027	0.973	702.5	34,488.4	48.4
4	693	15	0.022	0.978	685.5	33,785.9	48.8
0—4	1,000	322	0.322	0.678	3,745.5	36,845.9	36.8
5—9	678	38	0.056	0.944	3,295.0	33,100.4	48.8
10—14	640	32	0.050	0.950	3,116.5	29,805.4	46.6
15—19	608	27	0.044	0.956	2,970.0	26,688.9	43.9
20—24	581	23	0.040	0.960	2,848.0	23,718.9	40.8
25—29	558	21	0.038	0.962	2,739.5	20,870.9	37.4
30—34	537	21	0.039	0.961	2,635.0	18,131.4	33.8
35—39	516	23	0.045	0.955	2,524.5	15,496.4	30.0
40—44	493	27	0.055	0.945	2,399.5	12,971.9	26.3
45—49	466	29	0.062	0.938	2,257.5	10,572.4	22.7
50—54	437	50	0.114	0.886	2,060.0	8,314.9	19.0
55—59	387	52	0.134	0.866	1,805.0	6,254.9	16.2
60—64	335	59	0.176	0.824	1,527.5	4,449.9	13.3
65—69	276	60	0.217	0.783	1,205.0	2,922.4	10.6
70—74	216	67	0.310	0.690	918.0	1,717.4	8.0
75—79	149	83	0.557	0.443	558.0	799.4	5.4
80—84	66	50	0.758	0.242	212.5	241.4	3.7
85—89	16	15.2	0.950	0.050	28.0	28.9	1.8
90—94	0.8	0.8	1.000	0.000	0.9	0.9	1.1
95—99	0.0	—	—	—	—	—	—

(註) x : 年齢

$l(x)$  : x才の生存数, 但し5才階級部分においては当該階級の初年の生存数

${}_n d(x)$  : 各才部分においてはx才の死亡数, 5才階級部分においては当該階級内における死亡数

${}_n q(x)$  : 各才部分においてはx才の死亡率, 5才階級部分においては ${}_5 d(x)$ の $l(x)$ に対する比

${}_n p(x)$  : 生存率 (年齢関係は死亡率と同じ)

L(x) : 各才部分においてはx才の生存年数, 5才階級部分においては当該階級内各才の生存年数の和

T(x) : x才以後の生存延年数

${}^o e(x)$  : 各才部分はx才の, 5才階級部分は当該階級初年の平均余命

$$d(x) = I(x) - I(x+1)$$

によつて  $d(x)$  を求め、5才以上では、

$${}_5d(x) = I(x) - I(x+5)$$

によつて  ${}_5d(x)$  を求めた。

(2) 死亡率  ${}_nq(x)$

$${}_nq(x) = \frac{{}_nd(x)}{I(x)} \quad \text{より求めた。}$$

(3) 生存率  ${}_np(x)$

$${}_np(x) = 1 - {}_nq(x) \quad \text{より求めた。}$$

(4) 生存年数  $L(x)$  曲線方程式を利用しうる個所では、 $x+0.5$ 才(各才部分)、又は  $x+2.5$ 才(5才階級部分)の  $I(x)$  の理論値を求め、各才部分ではそれをそのまま  $L(x)$  とし、5才階級部分ではそれを5倍して  $L(x)$  とした。曲線方程式を利用出来ない個所(前記接合個所)では、

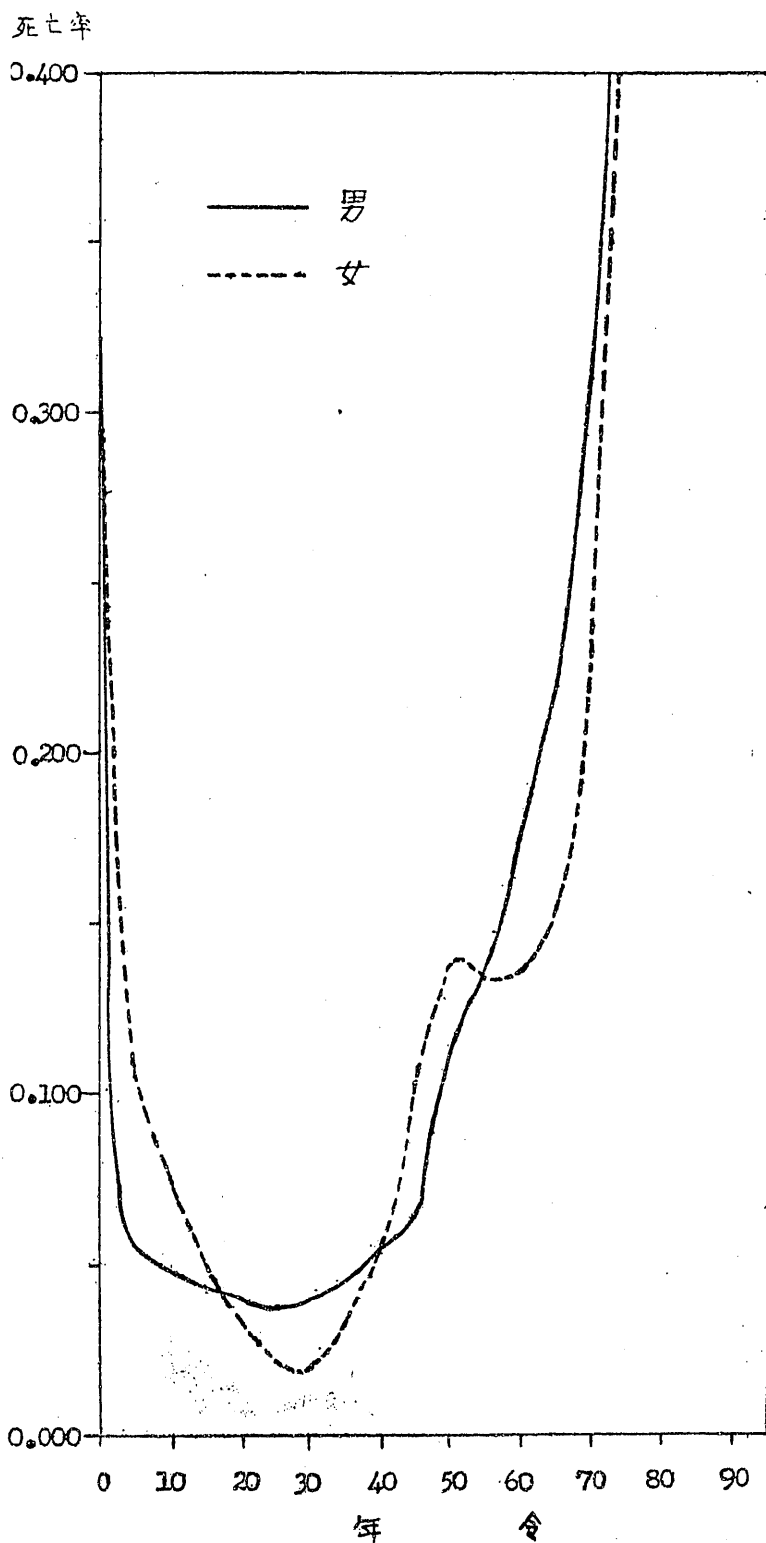
$\frac{1}{2}[I(x)+I(x+1)]$  (各才部分)、又は  $\frac{1}{2}[I(x)+I(x+5)]$  (5才階級部分) を求め、前者はそのまま  $L(x)$  とし、後者はこれを5倍して  $L(x)$  としたこと前の場合と同様である。なお 90-94才(男)

(2) 女

x	I(x)	${}_nd(x)$	${}_nq(x)$	p(x)	L(x)	T(x)	${}^oe(x)$
0	1,000	189	0.189	0.811	905.5	36,468.7	36.5
1	811	42	0.052	0.948	787.1	35,563.3	43.9
2	769	20	0.026	0.974	777.8	34,776.1	45.2
3	749	21	0.028	0.972	738.5	34,018.3	45.4
4	728	24	0.033	0.967	716.0	33,279.8	45.7
0-4	1,000	296	0.296	0.704	3,904.6	36,468.7	36.5
5-9	704	74	0.105	0.895	3,335.0	32,563.8	46.3
10-14	630	48	0.076	0.924	3,017.5	29,228.8	46.4
15-19	582	29	0.050	0.950	2,827.5	26,211.3	45.0
20-24	553	18	0.033	0.967	2,714.0	23,383.8	42.3
25-29	535	11	0.021	0.979	2,646.5	20,669.8	38.6
30-34	524	10	0.019	0.981	2,596.0	18,023.3	34.4
35-39	514	17	0.033	0.967	2,533.0	15,427.3	30.0
40-44	497	27	0.054	0.946	2,427.5	12,894.3	25.9
45-49	470	47	0.100	0.900	2,250.0	10,466.8	22.3
50-54	423	58	0.137	0.863	1,970.0	8,216.8	19.4
55-59	365	49	0.134	0.866	1,702.5	6,246.8	17.1
60-64	316	43	0.136	0.864	1,471.5	4,544.3	14.4
65-69	273	41	0.150	0.850	1,263.5	3,072.8	11.3
70-74	232	54	0.233	0.767	1,043.5	1,809.3	7.8
75-79	178	104	0.584	0.416	671.5	765.8	4.3
80-84	74	73.3	0.991	0.009	94.0	94.3	1.3
85-89	0.7	0.7	1.000	0.000	0.0	0.3	0.4
90-94	0.0	—	—	—	—	—	—



図3 死亡率曲線  $q(x)$



及び 85-89才(女)においては曲線により  $l(x)$  を各才別に算出検討した上  $L(x)$  を求めた。

(5) 生存延年数  $T(x)$   
最高年齢階級より順次  $L(x)$  を累積加算して求めた。

(6) 平均余命  $\overset{\circ}{e}(x)$   
$$\overset{\circ}{e}(x) = \frac{T(x)}{l(x)}$$
 より求めた。

こうして作成された生命表を示すと表5の如くなる。

### 平均余命

こうして生命表は作成されたが、虎岩村の人口に対して静止人口を仮定したことは、それを実証しようするような直接的資料に基いたわけではないこと、又基礎となつた死亡数が各才別でなく5才階級別であつたこと又死亡数の大きさが十分大きくなかつたこと等の理由で、この生命表は極めて推測的な程度にとどまらざるを得ない。したがつてこの中生存数、死亡数、死亡率等についての立入つた考察は特に行わず、だゞ最終的に平均余命についてのみ簡単な考察を試みておこう。

(1) 先ず男女の平均余命を比較すると、15-30才、50-65才に於ては女が大であり、10才以下及び75才以

上では女が小であり、40—45才でも僅かに小である。e(0) は男 36.8 才に対して女 36.5才となつて  
 いる。女の平均余命曲線は生存数曲線と共に男のそれらに比べて若干の不規則さを示している（図  
 4及び1）。これは男女の相違を示すばかりでなく、女の死亡記録そのものの不完全さを暗示してい  
 るように思われる。

(2) 我が国の第1回生命表（1891—1898）と比較すると、15—70 才では比較的接近しており甚し

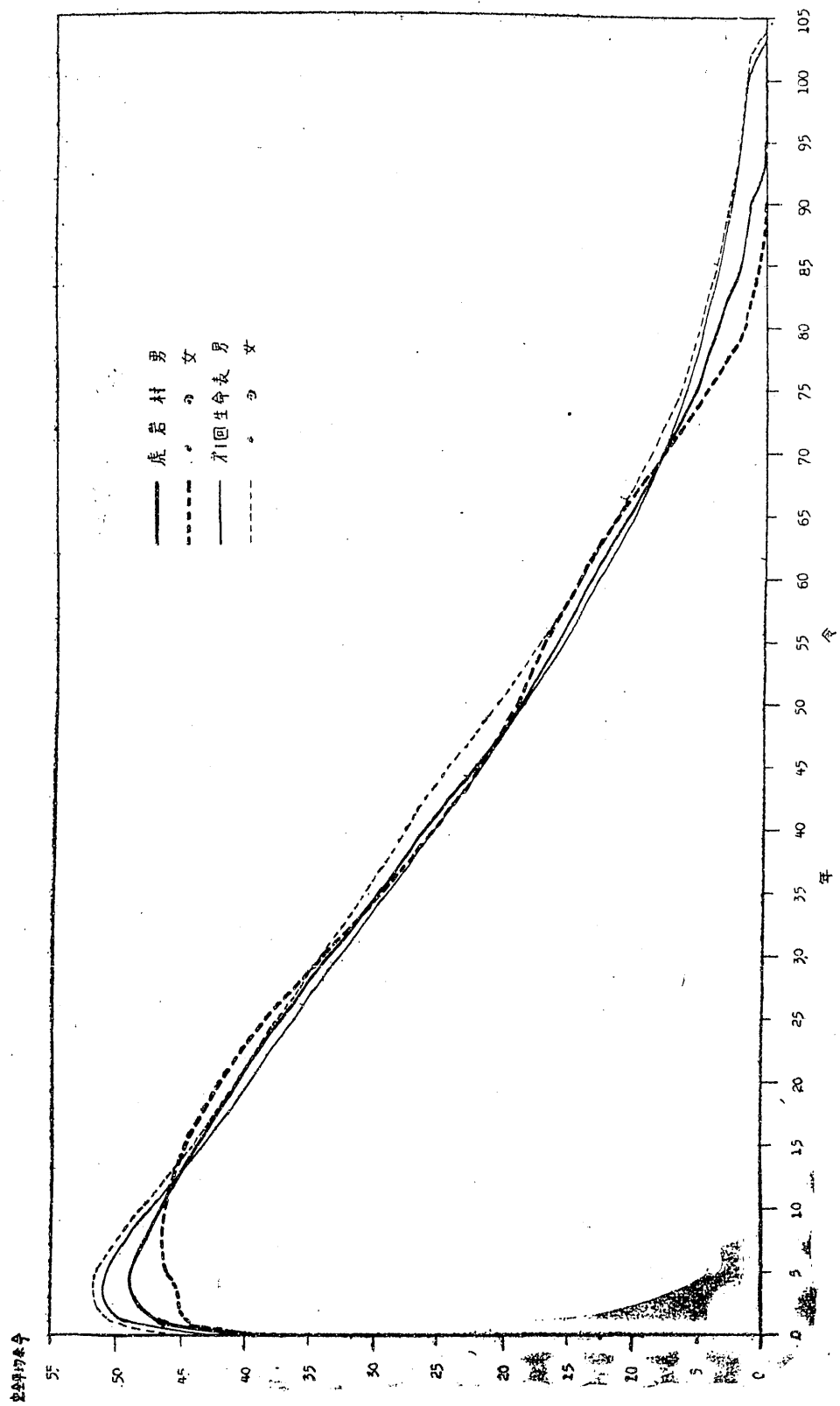
表6 各国平均余命との比較

	x	鹿 岩 村 1812—15	第1回生命表 1891—98	南 支 那 <sup>1)</sup> 1800—49	オランダ <sup>2)</sup> 1816—25	フランス <sup>3)</sup> 1817—31	スウェーデン <sup>4)</sup> 1816—40
男	0	36.8	42.8	—	29.3	38.3	39.5
	5	48.8	50.7	—	—	—	—
	10	46.6	47.5	—	40.7	47.0	45.2
	15	43.9	43.4	—	—	—	—
	20	40.8	39.8	33.7	32.9	40.0	37.3
	25	37.4	36.5	39.5	—	—	—
	30	33.0	33.0	27.4	27.6	34.0	30.3
	35	30.8	29.4	24.4	—	—	—
	40	26.3	25.7	21.5	21.9	27.0	23.7
	45	22.7	22.2	18.8	—	—	—
	50	19.0	18.8	16.2	16.4	19.9	17.6
	55	16.2	15.7	13.7	—	—	—
	60	13.3	12.8	11.5	11.6	13.3	12.1
	65	10.6	10.2	9.3	—	—	—
	70	7.9	8.0	7.4	7.5	8.1	7.4
	75	5.4	6.2	5.7	—	—	—
	80	3.7	4.8	—	4.8	4.8	4.0
	85	1.8	3.7	—	—	—	—
90	1.1	2.6	—	3.9	3.2	—	
女	0	36.5	44.3	—	35.1	40.8	43.6
	5	46.3	51.5	—	—	—	—
	10	46.4	48.1	—	45.0	47.4	48.6
	15	45.0	44.2	—	—	—	—
	20	42.3	40.8	36.8	37.0	40.1	40.8
	25	38.6	37.6	34.0	—	—	—
	30	34.4	34.4	31.0	30.7	33.4	33.4
	35	30.0	31.1	28.0	—	—	—
	40	25.9	27.8	25.0	24.8	26.6	26.4
	45	22.3	24.4	22.0	—	—	—
	50	19.4	20.8	19.0	18.7	19.6	19.6
	55	17.1	17.4	16.1	—	—	—
	60	14.4	14.2	13.3	12.8	13.2	13.2
	65	11.3	11.4	10.7	—	—	—
	70	7.4	8.8	8.3	8.0	8.1	8.0
	75	4.3	6.7	6.0	—	—	—
	80	1.3	5.1	—	4.8	4.8	4.5
	85	0.6	3.9	—	—	—	—
90	—	2.7	—	3.5	3.2	—	

1) I-chin. Y. : 前掲書

2), 3), 4) Dublin, L. I., Lotka, A. J. & Spiegelman, M. : Length of Life. The Ronald Press Company, N. Y. 1949.

图 4 完全平均余命曲线



い差はみられない。10才以下及び75才以上では虎岩村の方が下廻る（表6，図4）

(3) 虎岩村と略同じ時代の外国の平均余命との比較。観察期間はまちまちであるが19世紀の前半についての、南支那、オランダ、フランス及びスウェーデンの平均余命を虎岩村のそれと比較してみると表6の如くなる。10—70才の平均余命をみると、男では大体フランスが最も大きく、女ではフランスとスウェーデンが相接近して最も大きい。虎岩村の男はこのフランスの平均余命を下廻るが、他の国の平均余命より大である。虎岩村の女の方は平均余命曲線が可成り不規則な形をしているため、他との比較がやゝ困難であるが、南支那及びオランダよりは上廻っている。夫々年代、期間、集団がまちまちのこれらの生命表の平均余命をこれ以上厳密に比較しても意味をなさないが、先の第1回生命表との比較も考慮に入れてみると、大体10—70才の範囲では虎岩村の平均余命は少しよすぎるように感ぜられる。之に対して75才以上の老年部分では、もう少し生きのびる可能性があつてもよさそうに思われる。老令死亡もまた夭折の場合と同様、記録もれがいくらかあつたのではないかと考えられる。

## 結 語

5才階級別死亡数のみに基いて江戸時代後期の1農村の生命表の作成を試みたのであるが、基礎資料が5才階級別であること、5才未満の死亡数に対して仮定的補足を行つたこと、静止人口を仮定したこと等の理由で、この生命表は極めて推定的な不完全なものであるが、いまゞで明治以前の日本人の寿命については何等報告がなかつたのに鑑みて、こゝにただ1ヶ村の例にすぎないものであるが、死亡記録を利用した生命表を示したものである。年令別特殊死亡率よりする出来るだけ完全な生命表がこれらの時代について作成されることを今後に対してし望むものである。